

大和座
通信

YAMATOZA

日々新面目

其の二十九

安東伸元

小学生から大学生まで、すなわち毎日勉強にいそしんでいる青少年の皆さんに一度読んでみてほしいと思う、七十二才の老人からの便りがあります。あなたたちは生まれた時から今日まで、絶えず耳に入ってくるいろんな音楽に囲まれて生活してきました。音の大部分はテレビやラジオなどから流れてきて、知らぬ間に否応なく聞かされるもの（人間の声と言葉・歌・楽器の音）です。そのほか、自分の好みで手に入れたCDやテープなどに収録され、気軽に繰り返して聞けるポピュラー音楽です。こうして毎日の生活に組み込まれた音楽は、好きな時に好きなだけ自分を楽しませ、又なぐさめてくれる大事なものになっています。学校では、芸術としての音楽が教えられます。それは、ベートーベンであったり、ショパンであったりする西洋ク

ラシック音楽がほとんどです。音楽の先生たちは、専門的に勉強してきた西洋音楽の知識を、学齢に応じて熱心に教えます。我が国の多くの市民は、年末になるとクリスマスソングや教会音楽を耳にして敬虔な気分を味わい、何となく心が豊かになったような安心をおぼえているようです。都会では毎日何処かで、数十人から数千人の観客を集める大小様々なコンサートが開催され、世界中のいろいろな音楽が楽しめます。ところで一方、除夜の鐘の音、僧の読経の声、新春を寿ぐ箏曲や能の囃子・謡などといった自国の古典伝統的な音は、礼祭日にだけ表に顔を出してくる特殊なものと考えられ、西洋音楽のように身近で親しみの持てる生活文化にはなっていない。一部の愛好者や研究者や古典伝統芸能と呼ばれる世界の専門家だけが、ありがたく思っただけで喜んでる様子しか目に入ってきてません。皆さんはこのような社会環境の国に生まれ、当然何の疑いもなくそれが日本であると認識して生きてきました。豊かな経済力と、その豊かさによって用意された素晴らしい文化社会、すなわち、世界中の芸術文化を居ながら自由気ままに楽しめる国家の有り様に、満足と誇りをさえ覚えて生きてきました。さてここで、皆さんに一つ質問をしたいと思います。このような満ち足りたすばらしい現状にありながら、何処か空しさ

を感じている人はありませんか。何でもあつて、それが簡単に手にはいる文化の飽満状況に身を置いているのに、本当に自分が求めているものが見つからない苛立ちと寂しさを感じている人はありませんか。私は、十六才から十九才にかけて、この文化の渦の中で煩悶した事があります。近頃、その時代の事が妙に生々しく思い出され、その思い悩みが何故起こったのかという、これまで理由が判らないままに抱え込んでいた疑問が明らかに解けてくるような気がしています。そこで、その事を少し話したいと思います。高校生であった或る日、テレビジョンと初めて対面しました。それは明らかに文化的衝撃を体験する出来事でした。そうして、我が家に箱形の受像器が鎮座した後、私の感覚は圧倒的な質量で浴びせられる西欧音楽のシャワーに毎日曝されることになりました。有無を言わさぬ説得力で、聴く者を感動の渦に引き込む交響楽。生まれて初めて耳にするモダンジャズの軽快な心地良さ。深い思索の世界へ導いてくれる教会カンタータやコラル。明解に民族と文化の違いを教えてくれるシャンソンやタンゴやサンバなどのリズムとテンポ。官能的なムード音楽。感覚を揺さぶるカンツォーネとカントリー。そのほか数え上げるとキリがない、多くの外来音楽が私の全身を貫き、心を虜にしました。その結果、ロシア

民謡や枯葉を歌いジャズ喫茶へ通い、まさに頭の天辺から足のつま先まで西洋音楽文化にかぶれていました。この時の感動は今も色褪せず私の感性に刻み込まれて生きています。しかしその頃、同時に音楽と歌舞伎に熱中していました。学業を放り出し、詰め襟の制服を着たまま歌舞伎座と音楽座に通い詰め、三年の間に主だった作品はほぼ鑑賞し終えました。なぜそのような時期があつたのか、これまで動機も理由も不明でした。ところがこの原稿のようなことを考え始めて、はたと気付くところが出てきました。その分析は次のようなことです。

人間の本源を謳歌しているように感じられる「文化の質」で、私を否応なく納得させる西欧の異文化に降参し抵抗出来ないでいる自分の中で、民族的な気概が頭をもたげたのでしようか、自国の古典への探求心が俄に起こつたのではないかと思われるのです。完膚無きところまで屈服させられる悔しさが働いて、わが身を内へ向かわせたのでしよう。私の父は音楽師でありましたから家には稽古人と謡の声があり、父も年に数回能を舞っていました。しかし「灯台下暗し」ということでしょうか、私は意識して音楽から身を遠ざけて暮らしていました。関心興味の的は、先に述べたように近世芸能と、奈良の古寺でした。唐招提寺へはよく足を運びました。やがて次の展開が起

こります。歌舞伎・音楽に熱中して近世江戸の芸能に近づきましたが、ファンにも臍尻にも通にもなれませんでした。愛好者や研究者になるための最後の一步が、どうしても踏み出せませんでした。性が合わないというのか、近世江戸の芸能文化との距離はこのときから出来、実は今においても縮まっておりません。そして此処で、しつかりと音楽に心が向きました。中世芸能文化の能は、明らかに西欧芸能文化と拮抗しました。私の中にくすぶっていた西洋に対する劣等意識が見事に解消しました。その事を確認実証する旅が、音楽に関わつてから今日に至る五〇数年間の私の生活軌跡と言えるかもしれません。紛れもない自国の古典を心身に備えられたからこそ、西欧古典の本源を知ることができ、真正面からその西欧と向き合える精神のバランスを手に入れることが出来たのだと思います。余計なことを一つ付け加えましょう。敗戦の時、私は一〇才の少年でした。戦時国家の小国民と呼ばれる、軍国主義教育を一杯施された国民小学校の学童でした。毛唐という言葉覚えて、本気で「鬼畜米英を撃滅せん」というスローガンを信じていました。

この少年期の原体験が幸いして、戦後軽快で甘美な音楽を先頭に押し寄せた征服者の文化に、精神まで陵辱されることを免れたと私は思っています。かろうじて自分の足

で立つ事を可能にする思想の均衡感覚を得たと思っっています。そして、今もこのバランス感覚を何より大事にして、その上で文句のつけようのない西欧芸術文化に、脱帽最敬礼をしています。思い返せば、私が一九才であつた時、わが身のすぐ近くに音楽があつたことは幸いでした。今年の五篇目になる「日々新面目」を書くにあたって、ふと思ひ立ち若い人達に問いかけたいと思つたことは以上です。もとより老婆心の所産と受け取られることを覚悟の上、活字にいたします。数日前から興味津々の思いで読んでいる一冊の本があります。大阪芸術大学の教え子で、ダンス(舞)に人生を賭けて精進しようとしている二〇代半ばの女性、私に読んでほしいと持ってきた書物です。「眼」が標題で、副題に(岡本太郎/美しく怒れ)とあります。岡本太郎の生き様や思想の何が、この若い娘の心情を捉えたのか、彼女は岡本太郎に心酔している様子です。彼女の言葉と書籍文中の記述を混ぜ合わせて、この事について私なりに論説を加えますと次のようなことになるでしょうか。書籍の題名にあるように、カメラに向かつて眼を一杯に開き、「芸術は爆発だ!」と叫ぶ異端前衛芸術家という印象が、世間一般の岡本太郎像です。確かに鋭い眼光には、こちらの心の中を見通し激しく問いかけるメッセージが秘められています。眼に

で立つ事を可能にする思想の均衡感覚を得たと思っっています。そして、今もこのバランス感覚を何より大事にして、その上で文句のつけようのない西欧芸術文化に、脱帽最敬礼をしています。思い返せば、私が一九才であつた時、わが身のすぐ近くに音楽があつたことは幸いでした。今年の五篇目になる「日々新面目」を書くにあたって、ふと思ひ立ち若い人達に問いかけたいと思つたことは以上です。もとより老婆心の所産と受け取られることを覚悟の上、活字にいたします。数日前から興味津々の思いで読んでいる一冊の本があります。大阪芸術大学の教え子で、ダンス(舞)に人生を賭けて精進しようとしている二〇代半ばの女性、私に読んでほしいと持ってきた書物です。「眼」が標題で、副題に(岡本太郎/美しく怒れ)とあります。岡本太郎の生き様や思想の何が、この若い娘の心情を捉えたのか、彼女は岡本太郎に心酔している様子です。彼女の言葉と書籍文中の記述を混ぜ合わせて、この事について私なりに論説を加えますと次のようなことになるでしょうか。書籍の題名にあるように、カメラに向かつて眼を一杯に開き、「芸術は爆発だ!」と叫ぶ異端前衛芸術家という印象が、世間一般の岡本太郎像です。確かに鋭い眼光には、こちらの心の中を見通し激しく問いかけるメッセージが秘められています。眼に

焦点を当てると、私はピカソと川端康成の肖像写真に同じ空気を感ずります。このメツセージが怒りでした。高所から発せられる教条的な社会批判の怒りではなく、真正正銘人間の本源に関わる問題を論じる、魂のほとばしりのような怒りです。本ではこれを美しい怒りと言っています。編者は、

「美しい日本人として怒る」岡本太郎を表明しようともしています。一〇年に及ぶ欧州パリでの生活は、人間の存在を底に据えた近代合理主義思想の正しい注入をもたらせたに違いありません。帰国して見た日本は、制度と因習に人間がしばられ、その構図を壊さぬための愚民思想が行政の基に存在している。その状況から見えてくる蛮行・悪行・偽計・詐欺・誤謬・虚偽・虚構を喝破して怒る岡本太郎を、彼女は美しいと言っています。

『眼 美しく怒れ』

著者／岡本太郎・篇者／岡本敏子

平成十年初版・平成十八年第三版

発行／(株)チクマ秀版社

東京都板橋区宮本町三〇 一
(〇三)三九六五 一四二 一

て惹かれていたのです。岡本太郎の日本及び日本民族への回帰思想は、本質への追究と深い洞察力においてまさに本物です。西欧帰りの異端芸術家などとはとんでもない。岡本一平・かの子を両親に持つ岡本太郎は、紛れもなく節度をわきまえ恥を知り、そして孤独を恐れずに毅然と生きる古代日本人の末裔です。長期間外国で暮らした文人や才人が、帰国後その国の文化文明を紹介する総代理店のような役目を負って、低劣愚昧なものを軽侮するかのよう日本批判を展開するという光景を、いやという程見て



安東伸元(あんどうのぶもと)
一九三五年大阪生まれ。一九六四年能楽協会入会、狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。
一九八一年より教育機関へ出講。現在、羽衣国際大学名誉教授、大阪芸術大学・大阪府立東住吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤講師。二一年、重要無形文化財(能楽)保持者総合認定を受ける。「日本能楽会」会員。「大和座狂言事務所」を主宰。

狂言を読む「佐渡狐」

山田師久

8月6日、アインシュタイン展を見てきた。相対性理論というよりアインシュタインという人物に焦点をあてた展覧会だった。印象的だったのは、アインシュタインが日本に招聘され、神戸港に到着して2ヶ月間、講演の合間に寺院や城郭を見て回り、日本の自然・文化・芸術そして日本人を絶賛した、という内容だった。ここで私が知ったアインシュタインの側面は平和主義者であるということ、ヘブライ大学の設立に貢献した人物だということ、そして音楽・絵画などの芸術を深く愛した文化人だということだ。相対性理論の発見によって、人類の進歩に多大な貢献をした物理学者というイメージとはかけ離れた人物像を見た。このことは、いかなるものでも視点を替えて眺めてみると、別の側面が見えてくるということである。

さて、狂言もさまざまな方向から眺めてみると面白いものが見えてくる。たとえば狂言「佐渡狐」は、佐渡の国のお百姓が、上頭(うえとう)の屋敷に年貢を納めるため、都へ上る途中、越後の国のお百姓と道連れになり、道々雑談するうちに佐渡に狐がいるかいないかということ争う。

佐渡の国のお百姓は賄賂を御奏者に渡して、賭に勝とうとするが、狐の鳴き声を知らず掛け物を取られてしまふ、という話である。この物語を簡単にまとめると、「越後のお百姓と佐渡のお百姓が掛け事をして、佐渡のお百姓が負ける物語」と言える。また別の視点で見ると、「佐渡の国のお百姓が賄賂をわたして賭に勝とうとする物語」また「越後と佐渡のお百姓が年貢を納める物語」とも言える。そこで、この両国のお百姓が納める年貢というものはどのようなものだったかを考えてみた。

狂言の中では両国のお百姓が御年貢を持ち込む際、扇を水平にして持つて上頭の御奏者所に入室し、御奏者の指示で御蔵の前へ持つて行く。そこで、何かの入れ物に扇の上のものを「さらさらさら」と注ぎ込むような所作をする。もちろん狂言の所作はシンボリックなものであり、それが現実の動作を表現しているとは限らない。それにしても「さらさらさら」と注ぎ込む年貢として想像できるものは何か。まず思い浮かぶものはお米である。しかし、いかに越後や佐渡が米所であるからといって、米を何百石も遠路はるばると運んだのだろうか。それにまたシンボリックとはいえ米粒をさらさらさらと入れて何百石と入れたとするのはあまりにも粗雑な演出と言える。

ところで、「上頭」というのは何者かと

いうと、荘園領主でありながらその地に住まずに京都に住んでいる者を指す。ここでは佐渡の国や越後の国の領主でありながら都に在住している者を指す。そして、お奏者というのはその荘園領主の諸事を主人に取り次ぐ役職である。もし荘園の年貢がお米であるなら、わずかな量ではすまないだろう。ちなみに『新潟県の歴史』(山川出版)によると十三世紀、「地頭請の制度はその年の作柄によらず、毎年一定の年貢納入を契約するもので、奥山荘では地頭高井時茂が領主である近衛家に毎年一〇〇石と御服錦一〇〇〇両を納入すること、銭納するときは一四〇貫文を納入することを条件に仁治元年(一二四〇年)に地頭請の契約をかわしている。」とあるように大変な量の年貢をおさめなければならなかった。狂言「佐渡狐」の舞台となった時代は十六世紀以降、銭が流通している時代であろうから、米一〇〇石を長距離運ぶより銭で納めたと考えるのが妥当かもしれない。そこでもし銭納ならば、一四〇貫というのがどれくらいの量が調べてみると、享保二年(一七一七年)にできた『書言字考節用集』には「一貫匁 イツクハンメ 千銭目也。其重猶錢一貫文之義」とある。一貫文は千匁、現在では三・七五キログラムであったから、一四〇貫で五二五キログラムあったことになる。そこでこれに近い状況を絵画資料で

確認することができないかと調べると、『平家物語絵巻』（林原美術館所蔵）に大量の依と銭を運んでいる様子が描かれている。そこには平清盛が、白拍子の上手である祇王を寵愛し、毎月米一〇〇石、銭一〇〇貫彼女に送ったとあり、その銭一〇〇貫を二頭の牛に荷車を引かせて運び、人足たちが肩に何本もの紐を通した銭を担いでいる様子が描かれている。これは十五世紀ごろの銭を運ぶ姿を描いている。すると、「さらさらさら」といれる所作を、銭を納入している姿だとはとつて言い難い。

そこでさらに年貢について思いをめぐらしていると、佐渡の国は平安時代から金の産出国であることを思い出した。『宇治拾遺物語』第五四話には、「佐渡国に金有る事」という話がある。能登の国に鉄鉱石を掘り出す者達の長が「佐渡に金の鉱石が出るところがあるそうだ」という噂をしているのを、藤原実房が聞きつけ、物を与えて噂の主に行つてくれるか」と問うと、「それならば行つて取つてきましょう」と小舟一艘に食料をのせて旅立った。一ヶ月たつて忘れた頃にこの男が帰ってきて黒ずんだ布の切れはしに包んだ金塊を、実房に渡して「ずこかへ消えてしまった」という話がある。これは、金の鉱石を掘り当てたものらしい。たしかに平安ごろから、佐渡は金の産出で有名だが、後に佐渡の相川町で大々的な金

鉱の採掘はじまるまでは、主に砂金の採取であった。一方、越後の国も藤原三代の

栄耀栄華な暮らしぶりや、また金色堂の造りを想えば、平安の昔から砂金が産出されていたことは想像できる。例えば『義経記』

には義経が秀衡に初めて対面する場面で、秀衡は金売り吉次に無事に御曹司をつれて来た労をねぎらい、「御辺の好む物なれば」と「貝摺りたる唐櫃の蓋に砂金一蓋入れて取らせけり」とある。これは奥州藤原氏の

繁栄が砂金にあることを示している。つまり、佐渡や越後のお百姓が御年貢として「さらさらさら」と入れたものは砂金だと考えるのが妥当と考えられる。そうすると、

砂金が採取された佐渡や越後の裕福な百姓が羨望的となり、笑いの種となつたのも頷けるであろう。佐渡に狐がいるかいないかという愚かな言い争いをし、御奏者に賄賂を渡してまで掛けに勝とうする姿に笑いが起こるのである。

このような視点で狂言「佐渡狐」をみると、他の国々の百姓ではなく、佐渡や越後の国のお百姓を笑いにした理由が少し見えてくるのではないだろうか。そしてこの狂言が上演された時代が、佐渡の国相川がゴールドラッシュに湧いた慶長年間であれば、「余の国にあつて佐渡の国にないものとはおられない」という傲慢な発言が事実に基づいたものだとも考えられるのである。

『新潟県の歴史』（山川出版）には次のような記述がある。「佐渡にある相川町は慶長五（一六〇〇）ごろから二〇年ほどの間に、他国から集まつた人々で約五万人の鉱山町が作られた。慶長頃の町並みは米屋町・炭屋町・紙屋町・市町など必要物資をあつかう商人を集中させて商人町を作つていた。そして巨大な消費都市が出現した。

消費の第一は鉄・炭・木材・油・鉛・塩などの生産資材である。次に生活物資である四〇五万石におよぶ輸入米・五〇〇〇戸の家を建てるための材木・生活のための薪・塩・紙燭・食料など、どれをとつてみても北陸一円の流通・生産構造に大きな影響を与えるものだった。また相川には大きな遊女町ができ、遊女屋が三〇軒もでき、それぞれが三〇人から四〇人の遊女を抱えた。

その総人数は一二〇〇人にものぼつたといふ。「これは『佐渡国略記』の記述に基づいて書かれたものである。つまり、慶長年間の一時期ではあるが、佐渡の相川村はゴールドラッシュに湧いたのである。人が集まり、町ができ、経済・文化が大きく変動し、北陸一円の経済に大きな影響をあたえるほどの好景気に沸いた。

補足

『新潟県の歴史』（山川出版）には次のような記述がある。「佐渡にある相川町は慶長五（一六〇〇）ごろから二〇年ほどの間に、他国から集まつた人々で約五万人の鉱山町が作られた。慶長頃の町並みは米屋町・炭屋町・紙屋町・市町など必要物資をあつかう商人を集中させて商人町を作つていた。そして巨大な消費都市が出現した。

消費の第一は鉄・炭・木材・油・鉛・塩などの生産資材である。次に生活物資である四〇五万石におよぶ輸入米・五〇〇〇戸の家を建てるための材木・生活のための薪・塩・紙燭・食料など、どれをとつてみても北陸一円の流通・生産構造に大きな影響を与えるものだった。また相川には大きな遊女町ができ、遊女屋が三〇軒もでき、それぞれが三〇人から四〇人の遊女を抱えた。

その総人数は一二〇〇人にものぼつたといふ。「これは『佐渡国略記』の記述に基づいて書かれたものである。つまり、慶長年間の一時期ではあるが、佐渡の相川村はゴールドラッシュに湧いたのである。人が集まり、町ができ、経済・文化が大きく変動し、北陸一円の経済に大きな影響をあたえるほどの好景気に沸いた。

補足



山田 師久(やまだ もろひさ)

大阪生まれ。一九八六年より安東伸元に師事。中世文学及び芸能を専攻研究。大和座狂言事務所の学術ブレン。月例^へ輪讀会^の座長を務める。学問的指導の他、若いスタッフたちには人生問題の良き相談役として長兄的存在。高等学校国語科教諭。

恩師

〜入門二十五周年を迎えるにあたって〜

森五六九

今からちょうど二十五年前。二十歳の頃、私は今は亡き春蝶の住み込み弟子としての生活を送っていた。おつき合いで遅くに帰宅してなお晩酌をする春蝶のお相手をさせて頂くのが私の日課だった。勿論、内弟子の間は飲酒は御法度であるから私はノンアルコールでのおつき合いだが、思えばこんな贅沢な事はなかった。恋愛の事から人生、国際情勢に至るまで話題は尽きず。現代へのアンテナはいつも鋭くはり巡らされ、それがそのまま春蝶落語のバックボーンを示していた。春蝶が関西大学の定時制に入学、国際政治学の専攻を始めたのは確か五十歳を目前にした頃だった。落語が現代とどう関わっていくかを模索していたのだろうか。師匠の好奇心は亡くなるまでずっと衰えることがなかった。享年五十一歳。志し半ばである。

落語家の世界はその師匠が亡くなると別の師匠の預かり弟子となることが多い。ことに東京では二つ目以下において師匠の推薦がないと真打ちにはなれないのでそれが当たり前。だが大阪にはそういった真打ち制度がない。とはいえ春蝶が没して我々弟

子のことを真つ先に心配して下さったのは春団治師匠その人であった。春団治師匠は故春蝶の師匠つまり私にとって大師匠にあたる。「春蝶君の弟子は僕が責任をもって預かる」と公言して下さった。にも関わらず春蝶の門弟三人はその後、そんな有り難い恩情をも無碍にするような申し出をしたのである。「できたら我々は春蝶の枝として、三名はあくまで春蝶門弟として、今後もやらせて頂きたいのですが・・・」それに対し春団治師匠の返答は簡潔だった。

「・・・その方が春蝶君、喜ぶやろ」付け加えて「けどな、君らは僕の孫弟子なんやから、お父さんがいてへん以上、何か困ったことがあったらいつでもこのおじいちゃんを頼りなさい」昇蝶、一蝶、蝶六。その日が落語家としての新しい旅立ちの日だった。師匠を育てたその師匠はやはり偉大である。春蝶の門を叩く事を決意したのは道頓堀の角座である。その日の舞台にはレッゴ―三匹の師匠方。人はこれほど笑えるものかと思わせるほどの大きな笑いのうねり。この後に登場したのが桂春蝶であった。か細い身体でひよろひよろと登場して座布団の上でふつと息をつき会場を見回すうち空気が一変。今までの笑いの渦と違う、また別の渦が沸いていた。五百席の空気を一瞬のうちに変え、たった一人自分のところへ持ってきた春蝶を心底かつこいと思つた。そ

の瞬間、私は師匠に惚れたのである。よく師弟関係を同性愛になぞらえる人がいるが、あれはある意味当っている。但しそれは肉体関係にない全く弟子の片思い。師弟の関係は単に技術の伝承ではなく精神的な繋がりが極めて大きい。取材などで「何故、師匠に春蝶さんを選んだのですか」というインタビューをよく受けるが自分なりに明解に答えられた試しがない。でも、これからはこう答えようと思う。「惚れてしまったんです」恋愛になかなか明解な理由はない。

狂言の師、安東との出会いは十数年前。

あるインスタロメンタルミュージシャンのコンサートがきっかけだった。上町六丁目にあつた近鉄劇場。音楽に合わせて安東が舞い、私はその劇中劇として十分ほどの落語を演じた。その時に先生が掛けて下さった。「一度私の稽古場にいらっしやいませんか？落語の邪魔にはならないと思うから、謡いの稽古でもやるといいでしょう」高音ばかりの私の発声をずいぶん気にして下さり、また先生のお誘いは極めて丁寧だった。当時、国分寺にあつた大和座の稽古場はいつも多くの出入りがあつた。芸に及ばず今の日本を取り巻く社会環境等・・・国分寺の稽古場は夜な夜なアカデミックな会話で盛り上がった。今はその場を千里山に移している。かつて大阪瓦町に緒方洪庵が「適塾」という蘭学塾を開いた。そこから大村

益次郎、橋本佐内、福沢諭吉・・・近代日本に貢献した多くの人材を輩出している。東京の小説家で演芸評論家、正岡容の門人からは人間国宝の桂米朝、俳優の小沢昭一、加藤武・・・。それらは単に「教室」というよりもやはり「塾」という言葉が相応しい。師の人格に人が集まり、その後、塾生たちはそれぞれの偉業を為した。大和座にも今なお狂言以外にそれぞれの道をもつて出入りする門人がいる・・・私にも思うところがある。

安東と出会った時から感じていた春蝶との符合。安東との出会いは亡くなった春蝶が導いてくれたと今も大真面目に信じている。安東の主義主張は皆さんもこの通信を通じてご存じだろう。春蝶もいつだったか、ラジオでの発言が元で放送局を外宣カーで囲まれてしまった事があつた。プロデューサーは慌ててその発言の撤回を春蝶に求めた。「春蝶さん、ラジオを通じて謝して下さい」「何で謝らんなんねん」頑としてその発言を取り消さなかつたのは春蝶らしいエピソード。とかく「反骨」は決して楽な生き方ではない。ともあれ知的でやんちゃな二人はどこか似ている。「可愛い」と言えば叱られるだろうか。両師は少年の心を抱いている。

今、時を経ていつしか私のスケジュールの半分近くを講師業が埋めるようになった。

府立高校 専攻学校 公民館活動 カルチャーセンター、社員研修に教員研修、修学旅行体験・・・先日は大阪市立大学の教壇にも上がらせて頂いた。講演活動は私にとって一番自分の主張ができる嬉しい場でもある。特に俳優や声優を目指す若者への講義やワークショップは私にとって自身のモチベーションアップに欠かせない存在となっている。しかし、ここへきて私は一抹の疑問を抱いている。果たしてこれでいいのだろうか。

今、私が何とかここにいられるのは多くの師匠や先輩方から単にスキルのみならず芸人や舞台人として一番大切な「了見」というものを伝えて頂いたからこそである。専門学校では単に先生と生徒の域をなかなか抜けられず、ついスキルや知識伝授の力リキラムに追われている自分がいる。これではただの職業教師に過ぎない。本来、芸の伝承は単に「先生と生徒の関係」ではなく、それをはるかに越えた「師弟関係」でなければ難しい。芸人や舞台人にとって一番大切な「了見」という精神的、哲学的な伝承が欠落するからだ。しかし、その伝承は師の人格あればこそ。確かに今の私には荷が重い。「君らは生涯かけて師匠と呼べる、師事する人を必ず見つけなさい。学校というシステムばかりに頼らず、人間関係を築いてそこから色んなことを吸収するべきです。そしてその師匠の気を絶えず読

みなさい。自分にとって怖い存在である人格者の側につくこと」不甲斐ない今の私にはこう伝える事が精一杯である。落語の台詞を覚えて落語を演れば落語家か。ある基準があつて、その基準の技術を越えたら落語家か？いや、そうではない。「芸は人なり」という言葉があるように落語家は生き方であり生きざまのような気がする。芸をスキルとして伝え、そこから職業人としての俳優や声優を生み出そうという教育システムの中にいる私がこういう事を言うのはいささか気が引けるが、芸において教室や学校の中だけでは教えられる事にはつきり限界がある。

私の部屋ではパネル大の春蝶がいつも微笑みかける。「可愛がつてもらいや」「素直が一番やで」「性根入れなあかんで」まるでこう語りかけてくれているようだ。それらは師匠がよく口にした言葉。何でもない当たり前の事だが、とどのつまりは落語家として究極これに尽きるのではなからうか。全て「芸は人なり」に繋がっている。妬み、嫉み、人の揶揄、揚げ足取りばかりしている者にろくな芸人はいない。また、そういう輩を大阪弁でインケツと言つ。「インケツとはあまり付き合いなや」これもこの業界に入つて上の者からよく言われた。そういうインケツの気は伝染する。それに「皮肉」は立派な笑いの手法であり時

に人を笑わせるものには違いないが言つてる当人が愛されるが難しい両刃の剣。と、これは自身が肝に命じておくべき事柄。性根入れて前向きに歩かんとね。

かくいう私はまだまだ発展途上。決して完成品ではなく立派な欠陥品。でも、それを承知で可愛がり見守つて下さる方々がいるからこそ現在何とかやれている。ところで十月二十七日(土)はワッパ八上方演芸ホールにて私の入門二十五周年記念独演会。春団治、安東、私の愚息たち、太神楽の海老一鈴娘らも助演して下さる。十八時半から前売り三千円。チケットぴあにて発売。ちなみにテーマは今年の始めに安東より門人にあてた言葉より拝借させて頂き「愚直」とした。何ら取り柄のない今の私にはこれしかない。・・・どうか、どうか、もう少しだけ甘えさせて下さい。(了)

二〇〇七・八・三〇



森五六九(もり じろく)

大阪生まれ。落語名・桂蝶六。大蔵流狂言方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大阪シナリオ学校の各非常勤講師の他、ECCアーチストカレッジの落語教室及び大阪府立桃谷高校特別非常勤講師など、「高座」ならぬ「講座」も勤める。現代社会にあつて、好ましい芸能人の在り方を模索中。

物言いつからだ1

金久蒼汲

私たちは自分のからだについてどのくらいの意識を持つているでしょうか。おそらく普段の生活の中ではほとんど意識せず、病気や怪我をしてはじめて自分のからだの異変に気付くという人が大半を占めるのではないのでしょうか。最近では体型や体力の衰え、運動不足を感じて、スポーツクラブやエステに通い、自分の理想とするからだに近付こうとする人々が急増しているものの、こうした関心も、単に健康や美容といった表面的な部分に止まっているように思えます。もちろん自分のからだに関心を持ち、理想のからだを作ることは素晴らしいことです。しかし、もつと自分の内面的な部分まで意識して、からだを人間の存在様式そのものとして捉えることはできないものではないでしょうか。

「ロゴポーズ」という言葉があるそうです。マイケル・ベネット原案・振付・演出のミュージカル「コーラスライン」の日本初演に出演されたある俳優に伺った話ですが、登場する十七名の人物には、それぞれの役柄を象徴する（ロゴ）立ち姿（ポーズ）があり、演出上たびたびその構えをするように徹底されたそうです。イメージで言うと、戦隊ヒーローものの最後の決めポーズのようなものでしょうか。本国から作品の上演権を得る場合、著作権の関係で舞台装置や演出に至るまで一分の狂いもなくコピーしなければならぬので、キャストینگについて、体格や体型、顔や年齢、声の質や所作まで指定されることがほとんどのようです。その中のひとつがロゴポーズ（おそらく造語）というわけです。セリフや歌や所作ではなく、あくまで立ち姿（構え）によって役の人物の内面を表現し、存在を印象付けるのですから、立つ（構える）という姿勢がどれほど重要なものが窺えます。狂言にも、ここまで徹底されたものではなくニュアンスも異なりますが、役柄を表現する上でこれと似た効果が見られます。例えば山伏の構えですが、演目や役者によって差はありますが、基本的には足を肩幅以上開き、胸を開き腕も大きく広げ、いかにも威厳たつぷりな構えで登場します。他にも大名の構え、太郎冠者の構えなど、それぞれの役柄を象徴する立ち姿（構え）があり、役者はその効果を意識して使い分けているのです。見物は、舞台上立つ役者の立ち姿から、その役の人物のイメージを無意識のうちに読み取っているのです。

ところでこれはなにも舞台上に限ったことではなく、私たちは普段の生活の中でも、立ち姿や姿勢から無意識的に相手のイメージを読み取っていると考えるのではないのでしょうか。初対面の人でも、その立ち姿をただで、その人がどんな性質でどんな感情を抱いているかということまで、何となく感じてしまうというのはよくあることです。人間は身体の調子を崩すと憂鬱な気分になり、逆に憂鬱な気分には何もする気が起きません。また嬉しいことがあった時には心が高揚し、全身に力がみなぎり、身体もはつらつとします。このように心と身体は切っても切り離せない密接な関係にあり、長年の職業や趣味や癖はもちろん、その人の思想や価値観、その時の状況や感情などがすべて織り交ざったものが、立ち姿として無意識のうちにその人の印象を決めているのではないかと思うのです。つまり私たちのからだは、その存在自体が無言のメッセージを送り続けており、その人独自の存在の仕方を表しているのです。

それならばこれを逆手にとって、演劇の力、それも日本人の身体に最も適した狂言の手法を用いて意識的に自分の印象を変えられるとしたら、もつと効果的に自分をアピールできるようなものではないでしょうか。役者が役の人物を巧みに表現するよう、自分の内面をからだに投影させる訓練を積むことで、自分の気持ちや考えを的確に相手に理解してもらえようになり、自分という存在そのものを思い通りに印象

付けることも可能になるのではないでしょうが。そのためにも、まずはその基本形を作ることです。古来演劇は、姿勢・態度の作法（仕来たり）を学ぶ機会でもあったと言われるように、私はこれを狂言という演劇に見出し、その抽出方法を探りたいと考えているのです。



金久蒼汲（かねひさ そうきゅう）
広島県生まれ。

大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。演劇人としての肉體訓練の重要さを自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。自国の古典芸能を体得し、より人間らしく生きるための「古典演劇教育論」の確立を目指す。二〇〇三年イラン公演、二〇〇四年インドネシア公演に参加。現在、橋本市こども狂言教室、NHK大阪文化センター講師。

「兵士の物語」

原 斗轟

2006年8月12日、京都金剛能楽堂において「兵士の物語」が上演されました。「兵士の物語」は1918年、ロシアの作曲家のストラビンスキーとスイスの作家のラミューズの手により第一次世界大戦後の困窮状態にある時代にスイスで作られた、語りと演技と踊りによる2部構成の音楽劇です。出演はバイオリン・コントラバス・トランペット・トロンボーン・クラリネット・ファゴット・パーカッションの7人編制のオーケストラと兵士、悪魔、姫そして語り部の計11人という小人数で、戦後の貧困な時代にふさわしい小規模な公演形式で作られました。その「兵士の物語」をアサクラコンサート企画と大和座狂言事務所の安東伸元の手により、ストラビンスキーとラミューズが込めたメッセージをそのままに、フランス語を古い日本語に変えて編集されました。2001年の初演以来、5回目の公演となる今回は、音楽監督兼バイオリニストの若林暢さんを含むオーケストラの競争たるメンバーと、パフォーマーで尺八奏者でもあるウベ・ワルターさんを悪魔に、そして語りを安東伸元、兵士を原斗轟の配役で上演されました。また能舞台で

の上演は今回が初の試みでした。

今回の上演での一番の鍵はやはり能舞台を利用したことです。これまでの4回の公演はスタンダードな設備の整った劇場で、暗転（場面転換の時、照明を消す手法）や上手（客席から見て右手側）や下手（客席から見て左側）を利用した演出をすることが出来たのですが、今回の能舞台はそうはいきませんでした。能舞台には3間四方の四角い舞台と橋掛かり、そして鏡板の松の絵、照明と言っても舞台全体を万遍なく当てるだけのものしかありません。その名のとおり能の為に作られた舞台ですので現代演劇に多用される舞台装置や照明は必要ないのです。さて、バレエや演劇や演奏会、映画、などを見るお客さんは演奏や出演者の会話を聞き、またはダンスや草、演技を見て、お話の情景や感情を思い浮かべ想像します。その演出方法において写実的で具体的なものは一般的に分かりやすく、インターテイメント性が好まれる昨今様々なジャンルで多用されています。ですがシンプルな舞台でシンプルな演出は目の前にある実際のものとは逆に観客の想像は無限に広がります。そこで能舞台は、ただ舞台装置や照明の無い簡素な舞台ではなく、見ている者を想像の世界に連れて行くことの出来る、これ以上ない程優れた「想像させる劇場」であると言えます。「兵士の物語」という

じる反面、この作品この催しに携わることが出来たことは、本当に幸運であったと思います。



原斗轟(はら とつこう)
福岡県生まれ。

大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。大学の講義において安東伸元の薫陶を受け、卒業後安東伸元に師事。古典の力を体内に埋め込み、現代演劇の様々な分野で生かすべく自身を鍛えている。二〇〇七年八月『兵士の物語』に於いて兵士役を勤める。

「孤舞」

久保朋子

大阪芸術大学を卒業して3年が経ちます。口で台詞を話すより、身体で話すことに興味を持ち、ダンスやバレエのレッスンに通っています。しかし、西洋のダンスを東洋の身体をもつ私が踊ることに違和感を覚え、壁にぶつかるとはしょつちゆうでした。そんなとき、学生時代の安東先生の講義やプレビューの稽古を思い出し、日本の古典をきちんと身体に入りたいと強く感じました。念願がなつて昨年より大和座で勉強させていただき、ちぎれんばかりに尾を振る犬のごとく稽古に足を運んでおります。

私は小舞が好きです。小舞を舞うとき、私はいつも独りきりです。私の身体の前には多くの観客、背中側には地謡、他の舞い手、こんなにたくさんの方が居る中、舞うのは私独り。ここですっかり型を忘れ、動けなくなり、泣き出そうが誰も助けてくれない。私の身体はとてつもない緊張感を感じ、押し潰されそうになります。それからもう一つ、舞台の上では、大きな力が作用して自身の身体を脅かします。それを私は足の裏で感じます。両足で踏んでいる舞台の床のずつと奥、果てしない地底から、深く大きな力を感じるのです。「舞台には魔

物が棲む」という言葉を聞いた事があります。能舞台のそれは、深く静かに眠るように舞台の地下に潜んでいます。歴史や伝統という力で肥大した魔物です。本番が始まると目を覚まし、演者の足の裏からじりじりと侵入してゆき、扇子を開く右手、一足出る脚、真つ直ぐに立つ腰、全てに圧力をかけ、稽古通りに舞う身体を脅かします。少しでも油断すれば、すってんころりん転んでしまいそうです。だから能舞台の魔物に挑む為に、臍の下にくつと力をこめ、膝を曲げて自身の力で立ち、目を据え、地を削るような摺り足の稽古を重ねなければなりません。

さて私は心がざわざわと落ち着かないとき、居ても立つてもいられないので、とにかくじたばたします。部屋を飛び出し、あちこち旅をしたり、ダンスのクラスをたくさん受けたり、友人と話したり、図書館にこもり貪るように本を読んだり、心を処方しようとする多くの方法を試します。しかし、どれもうまくゆかず帰り道に溜息をつく時があります。そんな時、誰も居ない部屋の中で心を空っぽにして独りで小舞を舞います。腰も入っていないで、摺り足も中途半端、間の取り方もいい加減、てんで型どおりではない舞です。自己満足で、決して舞台で舞うための稽古ではありません。けれどもその小舞は私の心を穏やかに静めてく

れます。何度か舞うととても安らぎ、心がすつとします。自分の身体に自分の心が戻ってきたような感覚になります。

舞台上挑むときの小舞、心を鎮めるための小舞、どちらも独りきりです。動きの美しさはもちろんです。私は「孤独に舞う」というところになんともいえぬ小舞の魅力を感じます。生まれるときも死ぬときも人間は独りぼっち。孤独に挑みつつも、孤独に安らぎを感じる。小舞が私に教えてくれました。これからも「一期は夢よ舞い狂へ」と叫びながら独りきりで舞いたいと思いません。

最後になりましたが、大和座通信に私の言葉を記載していただくことになり、本当に恐れ多いことと感じています。このような機会を与えてくださった安東先生、先輩方、そして皆様に、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

大和座狂言事務所関連 催しのお知らせ

十月

二十三日【火】午後六時 大阪府立桃谷高等学校
古典鑑賞会『落語と狂言』 (対象：関係者のみ)

「蝸牛」

(山伏) 安東伸元

(主人) 金久蒼汲

(太郎冠者) 小田兆紀

(後見) 原斗轟

他

二十四日【水】午後二時 加茂町文化センター

「あじさいホール」

京都府立木津高等学校 (対象：関係者のみ)

『芸術鑑賞会』

「時うどん」「七度狐」

「佐渡狐」

(越後のお百姓) 原斗轟

(佐渡のお百姓) 金久蒼汲

(奏者) 安東伸元

(後見) 寺西将惶

二十七日【土】午後六時半 ワッハ上方演芸ホール

桂蝶六入門二十五周年記念独演会

「愚直」

出演：桂春団治、桂蝶六、桂吉坊

海老一鈴娘(太神楽)

安東伸元(大蔵流狂言方)

森達也(蝶六長男)

森聖龍(蝶六次男)

狂言「靱猿」

(大名) 安東伸元

(太郎冠者) 森達弥

(猿曳き) 森五六九

(猿) 森聖龍

(地謡) 小田兆紀・金久蒼汲・原斗轟

入場料 前売り 三〇 円

当日 三五 円

お問い合わせ

賑わいや 〇六六一六七・一五二五

チケットぴあ 〇六六三六三・九九九九

十一月

十七日【土】午後一時 羽衣国際大学

「一号館四階一四〇一教室」

『第三回 HEC狂言の会』 (公開無料)

「鬼瓦」 (大名)刀禰昭一(太郎冠者)小田兆紀

「しびり」 (主人)吉野富士子(太郎冠者)八木めいこ

「口真似」 (主人)前島逸子(太郎冠者)北野有子

(客)玉井万須子

「因幡堂」 (夫)小田朋子(妻)上田年子

「伊呂波」 (親)小泉益枝(子)安賀万子

「伯養」 (伯養)比嘉義一(琵琶貸)佐藤文雄

(勾頭)日浦義夫

「梟」 (山伏)小寺諒一(兄)青木和子(弟)原斗轟

二十一日【水】 東広島市立芸津中学校

平成十七・十八・十九年度文部科学省学力向上拠点形成事業

東広島地区学力向上推進協議会公開授業研究発表会

『講演と狂言』

萩大名

二十二日【木】 東広島市立芸津中学校

『狂言鑑賞公演』

柿山伏・附子

十二月

一日【土】 立命館大学

『日本比較生活文化学会』

講演とディベート

シリーズ公演五十回記念

十二月十二日【水】午後二時

A & Hホールシリーズ公演

「古典伝統芸能と出会うひととき」その五十
新シリーズへ「眞の古典力」 『閑吟集を謡う』

狂言『胸突』

(シテ) 小田兆紀

(アド) 原斗轟

(後見) 寺西将惺

狂言『空腕』

(アド) 安東伸元

(シテ) 金久蒼汲

(後見) 原斗轟

入場料 会員 一二円

一般 一五円

お問い合わせ A & Hホール

〇六六八七三二六七

NHK大阪文化センター新講座

『狂言エクササイズ』

講師 / 金久蒼汲

開講日時 / 毎月第二、四金曜日
午後一時～二時半

(初回は十月十二日です)

このエクササイズは、私たち日本人に最も適した狂言の発声、所作をを訓練し日常に採り入れることで、精神的にも肉体的にも健康的なからだ作りを目指すというものです。

「立つ」「歩く」「謡う」をキーワードに、内に秘めた自己表現力を探ります。

お問い合わせ / NHK大阪文化センター

Tel / 06(6343)2281

<http://www.nhk-cul.co.jp/school/osaka/>

将惶の新局面

「コミュニケーションの衰弱化」

近頃、電車などを利用しての時に辺りを見渡してみますと、子供から大人まで携帯電話や携帯ゲームに夢中になっている姿をよく見掛けます。この数年で通信やコンピュータが急速に発達した現代社会に於いては、ごく普通の姿なのかもしれません。ただ、私が気になるのはその人たちの表情です。携帯電話を使用している人達の表情には多少の変化が見られます。それは、携帯電話を通じて誰かとコミュニケーションをとっているからだと思います。コミュニケーションをとるという事は、相手の事を考えます。相手の事を考えるという行為から、自然と微笑んだり・ムツしたりと表情に変化が現れてきます。携帯ゲームに夢中になっている人達の多くの表情は、とても虚ろで曖昧な印象を受けます。そのような印象を受けるのは、ゲームが映像などの情報をただ与えるだけで、ゲームをしている人が感情の変化をぶつけ対象が無いからだだと思います。

人と人が面と向かって、意見を交わしたり物事を共有したりする事によって、楽しいと感じたりストレスを感じたりと色々な感情が表れてきます。色々な感情を体感する事で、感受性が豊かになり表情も生き生きとしてくるのではないのでしょうか。又、コミュニケーションをとる対象は人だけに限らず、自然や動物もこちらから全力でぶつかってあげば様々な刺激を与えてくれる対象だと思えます。

編集後記

九月の中旬、韓国サムルのグループと日本の和太鼓のグループの公演が韓国であり、私は通訳としてそのお手伝いをしてきました。長年交流を続けてきたこの両グループは、お互いに言葉や文化は異なりますが、深いところでもしつかり結ばれているという事がつきりと伝わってきました。言葉を越えたプロ同士の競演は最高で、それぞれの演奏はもちろん、両グループの共同演目も大変盛り上がりました。日韓が最高の形で融合した姿を側で見ることができて幸せを感じました。

公演期間中、日韓両出演者の方々から沢山のお話を伺うことができたのですが、その根底を支えている信念や演奏に対するプライドなどに強く心を打たれました。両グループがここまで強く結ばれているのは、表現方法は異なっても、目指すものや信念が同じだからなのだと思います。「一つの事がきちんとできる人はどの分野においても通用する」と聞いた事があります。今回、両グループとの出会いで、「一つの事がきちんとできる」というのは方法論ではなく、精神論なのであるという事を確信致しました。表現方法は様々であっても根底に流れているものは同じ。蝶六さんが今回原稿で書かれている、「師に学ぶべ

き了見」というのは、まさにこのことなのだろうと思いました。師の人格に集まった私たちが、この「了見」を如何に得て如何に伝えていくか、それが我々若手の課題だと思います。いつも惜しみなく知識を伝授してくださる先生や先輩方に感謝致します。

さて、「大和座塾」の塾生からも原稿が出るようになりました。大和座に集まって話されるアカデミックな話題が、若手を刺激していった結果、自分が何を感じ、何が言いたいのか、どこへ向つていこうとしているのかをしつかり考えるようになったという事だと思います。今期、大和座は「真の古典力」についてシリーズを展開してきました。いろんな事に問題意識を持って深く考える力も、この「古典力」の一つだと思います。

金久が担当するNHK文化センターの「狂言エクササイズ」がいよいよ今月十二日から始まります。彼の中に蓄積された「古典力」がどのように展開されていくのかどうぞご期待ください。NHK文化講座に関する詳しい情報は、大和座狂言事務所のホームページをご覧ください。

大和座はA&Hホールで様々なシリーズ公演を展開してきました。お陰様でそのシリーズ公演が次回で五十回目を迎えます。

A&Hホールの公演は大和座の信念をぶつけてきた公演であります。A&Hホールの今年最後の公演であり、シリーズ五十回目という記念すべき公演が、十二月十二日にあります。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

秀

発行日 二〇〇七年 十月三日
 編者 許 秀美
 発行者 安東伸元

大和座狂言事務所

代表 安東伸元

〒五六五〇八四一

吹田市千里山東二丁目三之三

TEL 06(6384)5016

FAX 06(6384)0870

<http://homepage3.nifty.com/yamatoza/>
 e-mail: BYX04535@nifty.ne.jp